市長賞

池野　里娃（いけの　りあ）　みなみ野君田小 ６年生

作品名：ふつうと平等

図書：ワンダー

　人にふつうなんか無い。あってはならない。私はこの本を読んで、そっ直にそう思った。
　私が書店で本を選んでいた時、最初に私の目に飛びこんできたのが「ワンダー」だった。私は自然と本の 1 ページ目を開いていた。1 行目を読むと、すぐに本の世界に引きこまれていた。ーふつうってことーこの本の主人公オーガストはふつうの十歳の男の子。でも、外見はふつうではない。もっと言えば、顔が変なのだ。これは実話をもとにつくられたストーリー。オーガストは十歳で初めて学校に行くけれど、顔が理由でいじめにあう。ふと私は考える。ふつうって何だろう。人は感覚的に他の人と比べて、「ふつう」を自分の中で決めている。だからこそ、周りと比べて顔がひどいといじめにあう。これは、あってはならないことなのではないのだろうか。「ワンダー」に大切なことを気づかされた。
　そして私がこの本の世界に引きこまれた理由はもう一つある。それはたくさんの人の立場から、様々な出き事が書かれているからだ。いじめられるオーガスト、オーガストの親友やオーガストのランチ仲間など。私はどの立場にも共感できる。それぞれの立場に自分を当てはめて読むと、たくさんのことを学べる。特に私は、オーガストの姉に共感できるところがある。かの女の名前はヴィア。私もヴィアと同じ姉の立場だ。ほとんどの親は、年下に手をかける。そして、年上を相手にする時間がない。正直私は今まで、これがいやだった。ヴィアと同じなのはここまで。ヴィアは、一歩前に進んだのだ。弟をはげまし、自分のことは自分でする。ヴィアは家族を思いやり、前進した。本の世界でも、私は私の人生を変える種を見つけた気がした。
　最後にはこんなことが書いてある。「自分がどんな人なのかは、時間の過ごし方をどう選んだか、人のためにどんな行いをしたか。そして、どのくらい人の心を動かしたのかで分かる。」この文は私の心に大きく刻まれた。

「ワンダー」は私の生きる道のヒントをくれた、大切な本だ。この地球上で「ふつう」という考えが減り、みんなが平等に暮らせる日が来ますように。